

# 「神はすべてを益とされる」Ⅱ

ローマ8：28

堀田修一

23・9・3

I 苦難、試練が様々な形でやってくる時、私たちは、自分の小ささ、弱さ、もろさを知らされ、益とされます。私たちは、必ずしも常に自分の真の姿を把握しているわけではない。悪魔は偽りの過信、神に頼らず、自分の力で生きるように誘惑する。私たちは、ただ神の恵みで救われましたが、自力で信仰生活を送れると思いがちになり、自分でも気づかないうちに神抜きの人間的な過信を持ち始める。しかし、神の御支配の中で起きる圧倒されるような出来事を通して、自分の小ささ、理解の欠けに気付かされる。自分の罪深さも、自分がどれほど神について間違った考えを抱きやすいかをご聖霊が心に教えてくださる。

## Ⅱ 苦難により謙遜が与えられる益

1. 物事がうまくいかなくなると、私たちは文句を言い、不平を言い、なぜ神はこんな試練が自分に起こるのをお許しになるのかとつぶやく。このようにして私たちは、神のあふれる恵みに感謝するのが遅く、神に不平を言うのに早い自分の罪深さ、永遠の愛で私たちを愛し続けておられる神に対して、どれほど感謝のない恩知らずの者かを実感させられる。与えられていたものをなくすと、神に与えられているものが当然でないと気づく。一つ一つを改めて感謝するようになる。試練、困難により私たちは立ち止まらされ、捕らえられ、自分の真の状態を悟らされる。つまり、へりくだらされる、謙遜という徳をいただく。へりくだらされるほど益になることはありません。へりくだっていない時の私たちは、危険（神から遠い）な状態にある。私たちは、常にへりくだらされる（高ぶらず、自分の弱さを認め神に頼り、寄り添ってもらえる人に祈ってもらう）ことは幸いなことです。謙遜さは、常に霊的（神に近い）生活における最大の防御です。ですから、私たちが弱さを自覚し、へりくだらされるとき、それは私たちにとって最高に良いことで、私たちをへりくだらせるものはみな、私たちの益となります。

2. 弱り果てるとき私たちは、ともすると忘れがちな大切な真理を悟らせられるのです。自分が赦される必要があることを改めて実感させられます。ご聖霊が私たちの心に働かれると、私たちは直ちに多くの罪、過ちに気付かせられ、神の赦しを求め始める。感謝を忘れたつぶやき、不平の罪。私たちのための今日まで数えきれない恵みを下さっている愛の神への感謝のない文句。神はすべての苦難、試練を通して、へりくだらせ、神と人からの力と助けを必要とすることを悟らせてくださる。このようにして、自分の無力さの中で私たちは神に立ち返らされるのです。放蕩息子のように。私たちが神のもとに立ち返らせ近づかせるものは何であれ私たちにとって良いこと、益です。苦難は私たちが神のもとに追い返します。私たちは、ひどい苦しみの中で、祈りの言葉も見つからず、うめきつつ神の前に静まります。それは、最悪ではなく、良い状態、益です。なぜなら、そのおかげで神にもっとより頼む者に変えられるからです。そのような苦難の中で私たちは、以前には知らなかった数多くの事柄を通して神について知り始めるのです。「キリストの恵みと知識（神を深く知る）において成長しなさい」（Ⅱペテロ3：18）のみことば通りです。苦難を通して、三位一体の神と神のみことばをもっと深く知るよ

うになります。

### Ⅲ 苦難により神の愛を知る益

1. 辛い試練、苦難を通して、私たちは真に神の、恵み、神のいつくしみ、神の優しさ、神のあわれみ、神の忍耐、神の寛容を知る益を受ける。私たちは神の素晴らしいご性質をわずかしか知っていない。苦痛を忍ぶ状況に至って初めて私たちは、神がどれほど愛しておられるか、どれほど喜んで助け導き、回復させようとされているかを真に学び始めます。「放蕩息子」(ルカ15章)のみことばは、神がその父親のように私たちを愛して取り扱っておられる恵みを教えている。父なる神を現すこの父親の素晴らしさは、弟息子の自由な願いを聞き入れ、自分で蒔いた種の刈り取りをさせ、見守り、戻って来るのを待ち、愛をもって迎え祝福されていることです。私たちは知識としては神の愛を知っていても、現実に関心自身が苦難を通るとき、ともにいて支えてくださる神の愛を深く知り始めるのです。
2. 神が私たちに神の素晴らしいご性質、御業、恵みを真に理解させてくださる方法は、私たちに起こる様々な事柄を用いて、私たちをもっと神に近づかせるという道です。それこそなぜ「すべてのことがともに働いて益となる」のかの説明です。色々な試練や苦難、「すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これ(神の訓練としての試練、苦難)によって鍛えられた人々に、義(神との深い正しい関係)という平安の実(御霊の実)を結ばせます」ヘブル12:11。試練や苦難によって私たちは、世のものにあまりに執着(偶像とする)し過ぎてはならないことを学ぶ。試練、苦難、病は、神が下さる永遠のいのちに比べれば、自分のこの地上での命は短いと悟られる。患難や病により、私たちは自分がこの地上では永遠の世界(向かいつつある栄光)に入るまでの「寄留者であり旅人」(ヘブル11:3)であると気づかせられる。結局、私たちは永遠の国に向かっている者であり、死は終わりではなく、神の救いの完成という栄光が自分を待ち受けていると気づかせられる。その栄光について私たちを考えさせるものはみな私たちの益となるのです。
3. 多くの人が次のように考えるのは自然だろう。「ここには矛盾して見えるみことばがある。『神を愛する人たち、すなわち神の御計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となる』。どのようにして、そのようなことがあり得るのだろうか。良い事が益に働くというなら分かる。益になるとは思えない逆に向いている出来事が、どのようにして益となるのだろうか。  
ある説教者は、時計という例証を用いて答えました。「あなたの時計の中を開いて見てほしい。何が見えますか。一つの歯車は左方向に回っているが、別の歯車は右方向に回っている。時計職人は、この時計がそのように動くように仕組み、すべての歯車を支配する主ぜんまいを取り付ける。そのぜんまいを巻き上げると、この歯車はこちらの方向、別の歯車は逆方向に回るが、すべてがともに働いて、時計の針が正確に動くようにしている。私たちの人生も同じです。人生の一面を見れば、どうしてこんなことが起きているのかと自問したくなる事が起きる。ある事柄は自分にとり良いと思われ、別の事柄は、自分にとり不都合なことばかりである。しかし、そのすべてを計画された偉大な神に思いを向けよう。早急な結論に飛びついてはいけない。偉大な神の究極的なご目的を見つめよう。霊的な目、神の視点で物事を見つめ続けるとき、じきに偉大な神がご自分の人知をはるかに超えた御業を心得ておられる事を理解し始める。一切は神の御計画です。私たち人間には今は理解できないことも多いが、神は次のみことばで

私たちに語り掛けられる→「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。一主のことは一主が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く（すべてを益とする道）、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い（すべてを益にする思い）」

イザヤ55：8，9。私たちに起こりつつある「すべてのこと」は「ともに働いて」いる。神は全てを計画し、私たちの人生という時計を巻き上げ、作動させ続けておられるのです。そして、すべてはともに働いて私たちの益（へりくだり神に近づく。神の御業の前進）となりつつある。私たちの地上での益のために、また、それをさらに越えて、私たちの究極的で最終的な益（栄化）のために。

私たちは、この地上の歩みでは、失望しそうになることもありますが、神がすべてを支配し、すべてをともに働かせて益として下さることを本気で信じ偉大な神を見上げ主にある希望をもって歩みましょう。